実践事例

漢詩の宇宙的発想を実感できる授業の試み
―李白『黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る』の指導を通して―

北川　久美子

一、はじめに

私は、古典の教材を扱う場合、生徒自らが古典作品のすばらしさを体現するような仕掛けを工夫することによって、「古典はおもしろい、その続きを読んでみよう」と考える生徒を一人でも増やしたいと願い授業に臨んでいる。それは、漢詩の場合も同じで、初めて出会う李白や杜甫の漢詩をより身近なものに感じさせ、漢詩に興味関心をもたせるための手立てを工夫しようと考えた。そのためには、何よりも宇宙観ともいえるスケールの大きな表現を味わわせたいと考えた。

本実践は、古典作品、中でも唐詩をより身近なものとして捉えさせるためのささやかな試みである。

二、研究の経過

1、韻文に対する環境づくり

（1）全校挙げて韻文（短歌・俳句・川柳）の創作に取り組み生徒の意欲関心を高める。

（2）文字環境を充実させるために手書きの作品を校内に掲示する。

○廊下の掲示

「生徒の川柳等の短冊」「漢詩『楓橋夜泊』の掛け軸」等を掲示し、生徒の関心を高める。

○授業での掲示物

「漢詩を毛筆で書いた模造紙」「フラッシュカード」「詩人の人物画」等を掲示することによって生徒の関心を高める。

2、古典和歌の指導との比較（「和歌の世界」三省堂　三年）

百人一首かるたが生活の中に残っていた頃とは違い、古典和歌は生徒たちにとって遠い存在である。そればかりか、新古今和歌集の象徴的な歌は大人にとっても大層難解なものである。そこで、万葉集や古今和歌集の歌から伊勢物語が生まれ、さらに源氏物語が生まれたことや、新古今和歌集の歌人たちは物語の世界を歌に詠み込んだことなど

を念頭において、寸劇を取り入れた授業を組み立てた。漢詩の授業においても、そのような工夫が必要であろう。

三、教材

1、教材

単元五　古典に親しむ　「漢詩の世界」（三省堂　現代の国語二、平成十三年版）

2、対象

岡山県赤磐市立吉井中学校第二学年　生徒四十二名

四、主題設定の理由

1、　本教材の位置

第一学年　「矛盾ー故事成語」

第二学年　「漢詩の世界」（「春暁」「黄鶴楼にて・・・」「春望」）

第三学年　「孔子のことば『論語』より」

いずれも書き下し文中心に学習し、漢文（漢詩）特有の調子を心ゆくまで味わうことを目標にしている。

光村図書指導書にも、「訓点をつける学習までは求めない。訓点つきの詩と書き下し文の表記とが読みが同じであることに気づけばよい。白文を日本語読みにしたという先人の知恵を少しでも感じられれば漢文への親しみが生ずるだろう。」とあり、漢文に親しむことに重点を置いている。

2、主題設定の理由

本教材は、生徒にとって漢詩と初めて出会う教材である。生徒たちに漢詩漢文に対するイメージを聞くと、難しい、堅苦しい、この先使わないから勉強しなくていいなどという答えがかえってきてがっかりする。一部だが「読み方はややこしいが、書き下し文はテンポがいいので読み心地がいい。」と前向きに答える生徒もいてほっとした。いずれにせよ、漢詩漢文に対する苦手意識が強いのは事実である。

そこで、初めて出会う漢詩をより身近なものに感じさせ、漢詩に興味関心をもたせるための手だてを工夫しようと考えた。漢詩の世界は日本の風景風物と異なった要素をもつ。中国ならではの長大な河や広い平野などを感じさせる必要がある。ここで取り上げる二人の詩人はともに中国を代表する詩人で、ともにスケールの大きな詩を作った。李白は「詩仙」ともいわれ、自由と酒と自然をこよなく愛し、スケールの大きい詩を作った。杜甫は政治や社会の矛盾を憂いて、民衆の苦しみを代弁する社会派詩人で「詩聖」とよばれた詩人でもある。李白、杜甫の詩を鑑賞することで、中国の雄大な自然を感じさせることができるのではないかと考える。中でも、李白「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」の詩は、正に宇宙的発想とも言えるスケールの大きな表現を有し、その転句の表現は、李白が地動説を唱えているといっても過言ではない。

本稿では、そのようなスケールの大きい比喩表現に着目させ、漢詩の表現の豊かさや表現の効果を味わわせたいと考え行った授業実践を

紹介したい。

五、指導の実際

1、学習目標

（1） 漢詩の味わい方を理解して、漢詩への興味・関心を深めさせ、学習への意欲をもたせる。［関心・意欲・態度］

（2） 漢詩を読むための基礎的な知識を学習して、漢詩特有の調子を生かして読み味わわせる。［読む・言語］

（3） 表現を味わいながら、作者の思いを読み取らせる。［読む］

2、指導計画（5時間扱い）

第一次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

・範読を聞いて、漢詩特有の調子に慣れさせる。

・書き下し文と訓読文とを比較して、漢詩について興味をもたせる。

・漢詩の形式や構成を知らせる。

第二次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3時間

・「春望」「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」「春暁」の情景や作者の心情をとらえさせる。

・三編の詩を音読や暗唱させる。

第三次・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間（本時）

・李白「黄鶴楼にて・・・」杜甫「旅夜書懐」を通して、漢詩の宇宙的発想とも言えるスケールの大きな比喩表現に着目し、漢詩の表現の豊かさや表現の効果を味わわせる。（指導案参照）

第２学年Ｂ組　　　　　　　　　　国語科学習指導案
平成１６年１０月１９日（火）　６校時　２Ｂ教室　指導者　教諭　北川　久美子

題　材	漢詩の世界（三省堂）
本時の目標	李白「黄鶴楼･･･」と杜甫「旅夜書懐」の漢詩を取り上げ，スケールの大きな比喩表現に着目し，漢詩の表現の豊かさや表現の効果を味わおうとする。（国語への関心・意欲・態度）

学習活動	教師の支援	評価の観点
1　既習の漢詩を暗唱する。	○　前時に予告しておき，大きな声で暗唱することで漢詩への興味関心を高める。	○　漢詩への興味関心をもっているか。《関心・意欲･態度》（観察）
2　漢詩の基礎知識を確認する。	○　絶句と律詩の形式と起承転結の構成法に限定して確認することを示す。	○　漢詩の基礎知識が定着しているか。《知識・理解》（観察）
3　本時の学習目標を知る。	○　目標を示し、学習意欲を高める。 ○　スケールの大きな現実離れした表現を見つけるよう助言する。	

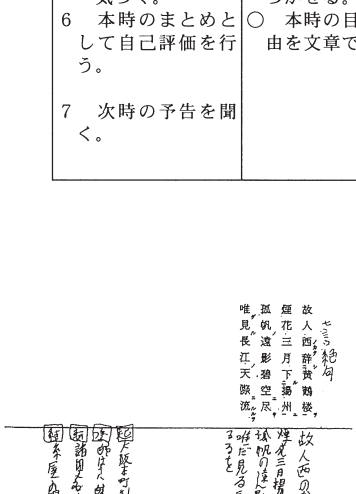
4　李白の詩を読む。 （1）音読し，現代語訳をする。 （2）転句の情景を絵に描く。 （3）表現の豊かさに気づく。	○　既習事項であるので指名して現代語訳させ定着を確認する。 ○　絵に描いたものを班の代表に説明させることによって漢詩への興味関心を高める。 ○　作者の心象風景が現実離れして表現されていることに気づかせる。 ○　地動説にもふれ，「碧空に尽き」の表現から漢詩のスケールの大きさに気づかせる。	○　作者の心情を深く読み取っているか。《読むこと》（観察・ワークシート）
5　杜甫の詩を読む。 （1）教師の範読を聞き，大意をつかむ。 （2）三句四句の情景を考える。 （3）表現の効果に気づく。	○　予習課題でプリントを配布し，詩にふれさせる。 ○　ワークシートに記入したものを班で発表し合い理解を深める。 ○　表現によって、感じる情景が違うことに気づかせる。	○　比喩表現の意味を読み取っているか。《読むこと》（観察・ワークシート）
6　本時のまとめとして自己評価を行う。 7　次時の予告を聞く。	○　本時の目標が達成できたかどうか，その理由を文章で記述させる。	○　評価カードに活動を通して学んだことを，自分の言葉で記入できているか。 《関心・意欲・態度》（評価カード）

3、具体的な指導内容（本時・・・指導案参照）

李白「黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る」（七言絶句）では、現代語訳した後スケールの大きい表現はどこか考えさせ、転句「孤帆の遠影碧空に尽き」の情景を各自絵に描かせた。描いた絵を班ごとに持ち寄り、班で一つの絵を完成させた。絵の説明を班の代表に説明させることによって漢詩への興味関心を高めさせた。どの表現からそう描いたのかを説明させた。「孤帆の遠影」という現実離れした表現であるが、作者の心象風景であることを補足する。「碧空に尽き」から地動説と言えるようなスケールの大きさに気づかせることによって，李白の宇宙的な発想に迫らせた。（資料2、資料3参照）

【資料2】

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　李白



【資料2】

かすみたなびくうららかな春（情景）遠くへ旅立つせいく親友を見送る別離の悲しみ（心情）を歌った詩。

◎作者の心情について、わかったことを書きなさい。

長江を見ようとしてももう見えなくなってしまったよ。

なんとしんじがたいかなしさだったよ。

S、そう、こうふうに想像ひろーーーーーーー

春望　杜甫

訓読文

五言律詩

1国破山河在
2城春草木深
3感時花濺涙
4恨別鳥驚心
5烽火連三月
6家書抵万金
7白頭搔更短
8渾欲不勝簪

書き下し文

1国破れて山河在り
2城春にして草木深し
3時に感じては花も涙を濺ぎ
4別れを恨んでは鳥も心を驚かす
5烽火三月に連なり
6家書万金に抵る
7白頭掻けば更に短く
8渾て簪に勝へざらんと欲す

口語訳

（国破れは）戦争のために破壊されてしまったが、（山河）は依然として元のままである。

（春）の訪れの早いにも春がやってきて（草木）が茂り、（春）を感じて（花）を見ては（涙）を流し、（別離）を思って（鳥）の鳴き声にさえ心を閉じては驚かされる。

（三カ月）にわたる戦いが続き、そんなせいで（万金）に値するほどありがたい（家書）となってしまった。

（白髪）を掻けば掻くほど抜け落ちて、もう（かんざし）でさえ留まらないほどになってしまった。

※「春望」とは、春のながめという意味。眼前の春景色を前にしてやるせない思い。

◎作者の心情について、わかったことを書きなさい。

この人はずいぶん動乱で心を痛めていると思った。

もいたいに、どうしてあれほど長く続いたんだろうと疑しく なったのは、これが首の白髪だけが多くなったと思った。

GS　書き方も丁寧で、文字の形も美しく、残っている。

※この詩は、二十字ぐらいで、

【資料3】

形式（七言絶句）　氏名（　　）

黄鶴楼にて孟浩然の広陵に之くを送る　李白

旧友人の広陵へ西の黄鶴楼を辞し
故人西辞黄鶴楼
煙花三月下揚州
孤帆遠影碧空に尽き
唯見長江天際流

故人西の方黄鶴楼を辞し
煙花三月揚州に下る
孤帆の遠影碧空に尽きて
唯だ見る長江の天際に流るるを

結　唯だ見る長江の天際に流るるを

◎転句「孤帆ノ遠影碧空ニ尽キ」の情景を絵に描こう。

夕日

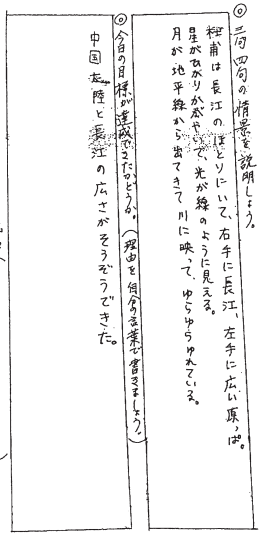
◎転句「孤帆ノ遠影碧空ニ尽キ」の情景を絵に描こう。

地球がきれい

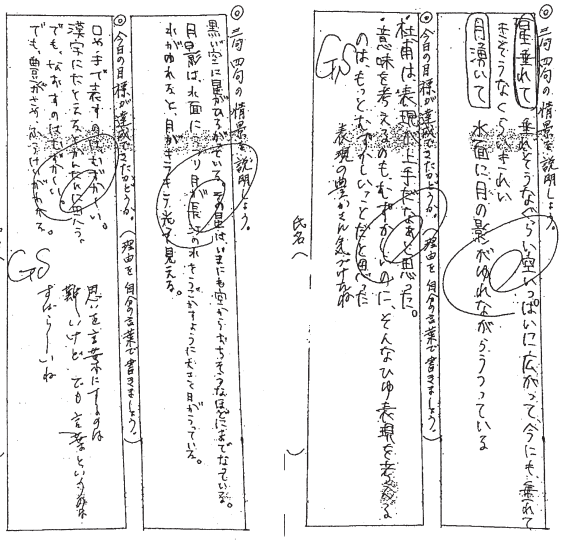
GS　中国の雰囲気がとてもよくでている。

さらに、杜甫「旅夜懐いを書す」（五言律詩）の大意をつかませ、三句四句「星垂れて平野広く／月湧いて大江流る」という比喩表現の情景を考えさせ、ワークシートに記入させた。班で話し合わせ、スケールの大きい比喩表現の効果に気づかせた。「星垂」から満天の星と広大な平野を想像させ、「月湧」は長江の雄大な流れや浮かぶ月を想像させた。これも現実にはあり得ない光景であるが、作者の心象風景（そのように見える）であることを補足する。広大な自然を描き、正に漢詩の宇宙観というにふさわしい漢詩であることに気づかせた。（資料4、資料5参照）

【資料4】



【資料5】



4、補足資料の紹介（別表・・・参考資料1参照）

（1）孟浩然・・・李白よりも十二歳年長で「夫子」と呼びかけて敬愛した。

（2）黄鶴楼・・・仙人が壁画の中の鶴を呼び出し，その背に乗って昇天したという伝説がある。（授業では同僚教師自作によるスケッチブックの絵で説明した。参考資料1の2の詩参照）

（3）杜甫「旅夜書懐」への影響・・・李白「渡荊門送別」の三句「山随平野尽」と四句「江入大荒流」の表現が杜甫「旅夜書懐」の「星垂平野広」「月湧大江流」に影響を与えている。（参考資料1の3の詩）

（4）宇宙的な発想（スケールの大きい表現）・・・李白のスケールの大きい表現の中に「広然小宇宙」というような表現があり、唐の詩人たちは宇宙的な発想をもっていたと思われる。（参考資料1の4の詩）

六、おわりに（成果と課題）

漢詩に対する苦手意識の克服ということでは、第一次の訓読文に慣れさせる段階で生徒たちは興味をもち、「漢詩は楽しい。」と答えるようになった。また、第二次の三編の漢詩の情景や作者の心情をとらえさせる中で、作者の心情に寄り添った感想を述べている生徒が多かった。「黄鶴楼にて・・・」の詩では、「友達を見送るのはとても悲しいなあと思う。見えなくなったらもっと悲しいんじゃないかなあと思った。」（Y男）、「旧友を見送るのは悲しい。話すこともできない。遠く離れて死ぬかもしれないと私は思った。」（E子）「春望」の詩では、「この人はすごく戦乱で心を痛めているんだなあと思った。どうして戦争がこんなにも長く続いたんだろうと悲しくなった。」（T子）「悲しい家族との別れも作者の気持ちもよく分かる。」（S子）「やはり家族は大切だなと思った。」（A男）

本時の活動を通して、生徒たちは李白と杜甫の漢詩のスケールの大きな表現をしっかり味わうことができた。転句の情景を絵に描く作業では、多くの生徒が興味を示し、思い思いの長江を描いた。「夕暮れの方が李白の寂しさが表現できる。」と考えた生徒も多く、なるほどと感心した。中には、水平線を丸く描き「地球は丸いから。」と答えた生徒も数人いた。その言葉を受けて地動説の話をすると、生徒たちはこぞって目を輝かせた。また、杜甫「旅夜懐いを書す」の三句四句「星垂」・「月湧」の情景を「満天の星の美しい輝き、長江に映った月が流れていく様」というように説明できた生徒は少数だが、それらの生徒の表現を紹介することで漢詩の比喩表現の豊かさを実感させることができた。

最後に、本時の目標が達成できたかという自己評価表によると、多くの生徒が「中国大陸と長江の広さが想像できた。」とし、漢詩の表現の豊かさを実感できたといえる。

今後は、さらに漢詩への興味関心を高めるために詩人の生涯やその他の詩についても紹介していきたい。また、漢詩紀行等の視聴覚教材（ビデオ、スライド等）を有効に活用し、スケールの大きな自然を実際に味わわせていきたい。

（きたがわ　くみこ／赤磐市立吉井中学校教諭）

【参考資料1】

1 孟浩然

贈孟浩然

吾愛孟夫子　風流天下聞。
紅顔棄軒冕　白首臥松雲。
醉月頻中聖　迷花不事君。
高山安可仰　徒此揖清芬。

孟浩然に贈る

吾は愛す　孟夫子
風流　天下に聞こゆ
紅顔　軒冕を棄て
白首　松雲に臥す
月に醉うて頻りに聖に中り
花に迷うて君に事えず
高山　安んぞ仰ぐべけんや
徒らに此に清芬に揖す

〈五言律詩〉 陝

私は孟浩然先生が大好きだ。その風雅な人柄は天下に知れわたっている。意気さかんな青年のころより官位につく望みを捨て、白髪の老年にいたるまで、雲のかかる松の木陰に起き臥ししておられる。月の光を肴にして、しばしば清酒に酔い、花の美しさに心奪われて、天子に仕えようともしない。

このように俗世を超えたりっぱな人柄は高い山のよう、どうして仰ぎ見ることができよう。私はただここで、先生の清らかな姿にご挨拶するばかりだ。

2 黄鶴楼

昔人已乘黄鶴去　此地空餘黄鶴楼。
黄鶴一去不復返　白雲千載空悠悠。
晴川歴歴漢陽樹　芳草萋萋鸚鵡洲。
日暮鄉關何處是　烟波江上使人愁。

昔人已に黄鶴に乗じて去り、此地空しく餘す黄鶴楼。
黄鶴一たび去って復た返らず。白雲千載空しく悠悠。
晴川歴歴たり漢陽の樹。芳草萋萋たり鸚鵡洲。
日暮郷関何れの處か是なる。烟波江上人をして愁へしむ。

4. 宇宙観（スケールの大きい表現）

① 贈汪倫

李白乗舟将欲行。
忽聞岸上踏歌声。
桃花潭水深千尺
不及汪倫送我情。

汪倫に贈る

李白　舟に乗りて将に行かんと欲す
忽ち聞く　岸上踏歌の声
桃花潭水　深さ千尺なるも
及ばず　汪倫　我を送るの情に

〈七言絶句〉 陝

② 遊泰山　六首

其一

四月上泰山　石平御道開。
六龍過万壑　澗谷随縈廻。
馬跡繞碧峰　于今滴青苔。
飛流灑絶巘　水急松声哀。
北眺崿崿奇　傾崖向東摧。
洞門閉石扇　地底興雲雷。
登高望蓬瀛　想像金篠台。
天門一長嘯　万里清風来。

其の一

四月　泰山に上る
石平らかにして御道開く
六龍　万壑を過ぎ
澗谷　随って縈廻す
馬跡　碧峰を繞り
今に于て青苔滴つ
飛流　絶巘に灑ぎ
水急にして　松声哀し
北眺すれば　崿崿奇なり
傾崖　東に向かって摧く
洞門　石扇を閉じ
地底　雲雷を興す
高きに登って蓬瀛を望み
想像す　金篠台
天門一たび長嘯すれば
万里　清風来たる

【語注】【巖巖】立ちならんではっきり見えるさま。【夾岸】武昌の西、江を隔てる七中島里にして相望む。【萋萋】草の茂っているさま。【鸚鵡洲】武昌の西南、大江中にある洲の名。【故郷】故郷。

【大意】昔一仙人が黄鶴にまたがり、白雲に乗って立ち去ってからは、此地はただ黄鶴楼を残すのみとなって、その仙人はまた見る由もない。仙人を乗せた黄鶴も、一たび去ってはもはや永久に帰ってはこない、ただ当時の白雲のみは千年後の今日でも昔に変ることなく悠悠としてお存している。しかしこれまた昔を問うべきよすがもない。

眺上から遠く望むと、晴れ渡った長江を隔てて對岸漢陽の草木がはっきりと見え、川の中の鸚鵡洲には春の若草が生え茂っているのも見える。やがて日暮れ、あたりが暮色におおわれると、故郷の空を望んでも、どこがそれやら殆とわからず、立ちこめる夕もやが、江上の水没を包んでゆく景色は、我をして強く懐郷の感に堪えさらしめるのみである。

3、杜甫「旅夜懐いを書す」の領連「星垂れて平野闊く／月湧いて大江流る」への影響

渡荆門送別　荆門を渡りて送別す

渡遠荆門外　来従楚国遊。
山随平野尽　江入大荒流。
月下飛天鏡　雲生結海楼。
仍憐故郷水　万里送行舟。

渡ること遠し荆門の外
来たって楚国の遊に従う
山は平野に随って尽き
江は大荒に入りて流る
月下りて天鏡飛び
雲生じて海楼を結ぶ
仍お憐れむ故郷の水
万里行舟を送るを

〈五言律詩〉　㊤

舟に乗って荆門山の外れまで遠く渡ってきて、これからは楚の国を遊覧する。山々は平野になるにしたがってなくなり、長江ははるか遠い曠野に分けいって流れている。月が落ちかけて、ちょうど天の鏡が飛ぶようであり、雲が生じて、海上に蜃気楼がおこるようだ。なんともうれしく懐かしいのは、故郷から流れてきた水が、万里のかなたまで旅の舟を送ってくれることだ。

玉女四五人　飄飄下九垓。
含笑引素手　遺我流霞盃。
稽首再拝之　自愧非仙才。
曠然小宇宙　棄世何悠哉。

玉女　四五人
飄飄として九垓より下る
笑みを含んで素手を引べ
我に流霞の盃を遺る
稽首して之れを再拝し
自ら仙才に非ざるを愧ず
曠然として宇宙を小とし
世を棄つる　何ぞ悠なる哉

〈五言古詩〉　㊤

四月、泰山に登ったが、かつて天子の登山のために開かれた山道の麓石は平らである。その昔、天子の六龍の馬車は多くの谷を過ぎ、谷川もそれに従ってめぐり回ったであろう。馬のひづめの跡は碧の峰をめぐって、今でも青苔の間に残っている。滝は高い峰から流れ落ち、水の勢いは激しく松風の音も哀しげである。北の方を見やると、屏風のような山が奇怪な形でそびえ、傾斜した断崖は東に向かって崩れかかっている。洞窟の門には石の扉が閉ざされ、そこは地の底から雲がわき雷が轟くような音がしている。

さて泰山に登って蓬萊・瀛洲を眺めやり、金鰲台を想像する。天門に向かって一たび長く嘯けば、万里のかなたから清い風が吹いてくる。すると、玉のように美しい仙女が四、五人、ひらひらと天から舞いおり、笑いながら白い手をさしのべ、私に不老長寿の流霞の盃を贈ってくれた。首を地につけ再拝して頂いたが、我ながら仙人になれる素質のないことを恥じずにはいられない。しかし心を広くしてみると、広大な宇宙も小さい。俗界を離れた気持から、のんびりした境地が開けるのである。

※。石川忠久著『漢詩をよむ　李白100選』(NHKライブラリー・日本放送出版協会、平成10年12月)
・内田泉之助著『新選唐詩鑑賞』(明治書院、昭和37年4月)

※参考資料の出典は、次の通りである。

・石川忠久著『漢詩をよむ李白一〇〇選』（ＮＨＫライブラリー、日本放送出版協会、平成十年十二月）

・石川忠久著『漢詩をよむ杜甫一〇〇選』（ＮＨＫライブラリー、日本放送出版協会、平成十年十二月）

・内田泉之助著『新選唐詩鑑賞』（明治書院、昭和三十一年四月）

※本稿は「第三十四回　岡山県漢字漢文教育研究会」で実践発表したものに加筆修正したものである。